

「社会科学としての経済学：カレツキのマクロ経済学」(Economics as a Social Science: The Macroeconomics of Michał Kalecki)

松谷泰樹 (Hiroki MATSUYA)

日本マクロエンジニアリング学会 第40回研究大会 (Web 会議方式)

2021年4月24日 (24 April 2021)

<要旨>

経済学は、「社会科学の女王」と称されている。日常において、「社会」とは何かと問われると、何かしら漠然とした抽象的な印象がするのであるが、字引をひもとけば、「人びとの集団(a body of people)」のことでありと具体的に示してある。カレツキが、Kalecki (1933) において、ケインズに先がけて、初めて、マクロ経済学の「基本前提」を提示することができたのは、それが「方法論的集団主義」を分析方法として用いていたことによるものである。その意味で、カレツキが分析方法として用いている「方法論的集団主義」こそが、マクロ経済学に、「存在意義 (raison d'être)」を与えるうえで、きわめて重要な役割を果たしているものとして捉えることができる。その場合、「古典派」経済学が、「方法論的個人主義」にもとづいて、個別経済主体の行動を分析する際に用いている「効用」概念の使用から免れて、それに代わって「所得」概念を用いることにより、まさに、有効需要の論理にもとづいて国民所得が決定されることを示す、マクロ経済学の形成を可能にしているのである。カレツキのマクロ経済モデルでは、不完全競争市場が想定されており、経済を構成する主体は、資本家と労働者の2階級であるとされ、それぞれの基本的性格が「能動的経済主体」と「受動的経済主体」であることが明らかにされている。その場合、労働者の所得である賃金は、有効需要の論理にもとづいて、資本家の意思決定によって決まるものであるとされている。ただし、Kalecki (1939) において指摘されているように、労働分配率に影響を与える1要因としての、団体交渉に代表されるような、労働組合による行動が、労働者に「能動的経済主体」としての可能性を与えるものとして取り上げられている。そうした賃金をめぐる労働者の集団的行動についてのさらなる考察が、Kalecki (1939), Kalecki (1943), Kalecki (1971) においてなされている。そこでの分析は、労働組合の行動を、労働供給の側面として、有効需要理論の中に組み込む役割を果たすものとして捉えられる。2階級それぞれを「集団」として捉えて、それらの所得をめぐる、観察可能な一般的な行動を考察しているカレツキは、「社会科学としての経済学」を提示しているだけでなく、いわば、最近の新しい経済学の領域として注目されている、行動経済学の先がけの1人であると見なすことができるかもしれない。

<目次>

I. はじめに

II. カレツキのマクロ経済モデル

1. Kalecki (1933) : マクロ経済学の「基本前提」の提示

2. 有効需要の論理に基づく国民所得の決定

III. 考察

1. 資本家モデル

2. 労働者モデル

3. 資本家と労働者の関係

IV. むすび

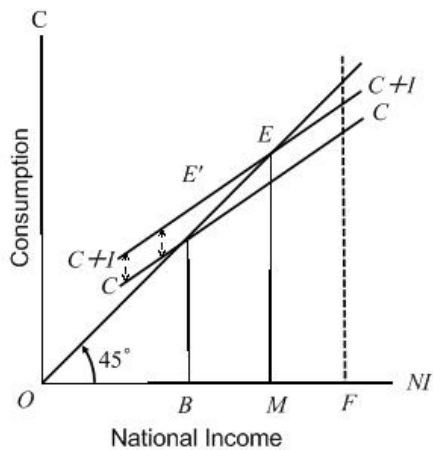


図1 Samuelson (1948, p. 260) をもとにして作成

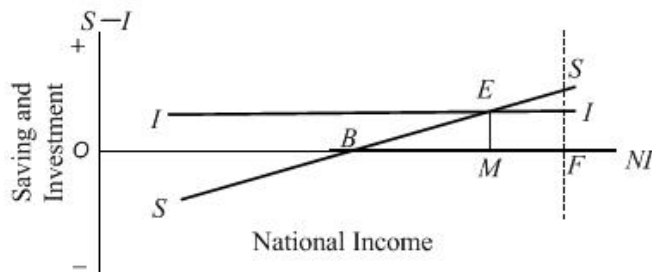


図2 Samuelson (1948, p. 259)

II. カレツキのマクロ経済モデル

1. Kalecki (1933) : マクロ経済学の「基本前提」の提示

(1) $P = C_k + A$ (利潤方程式)

(2) $C_k = B_0 + \lambda P$

(2') $C_k = \lambda P$

(3) $P = \{ 1 / (1 - \lambda) \} A$

(4) $P - C_k = S$

(4') $(1 - \lambda) P = S$

(1') $P - C_k = A$

(5) $A = S$

2. 有効需要の論理にもとづく国民所得の決定 (Kalecki 1929, 1930, 1933, 1938)

(6) $Y_s = Y$

(7) $Y = P + W$

(8) $Y_d = C_k + A + C_w$

(2) $C_k = B_0 + \lambda P$

(9) $P = (1 - \alpha) Y$

(10) $A = \bar{A}$

(11) $C_w = W$

(12) $Y_s = Y_d$

(13) $Y^* = B_0 / \{ (1 - \alpha) (1 - \lambda) \} + [1 / \{ (1 - \alpha) (1 - \lambda) \}] \bar{A}$

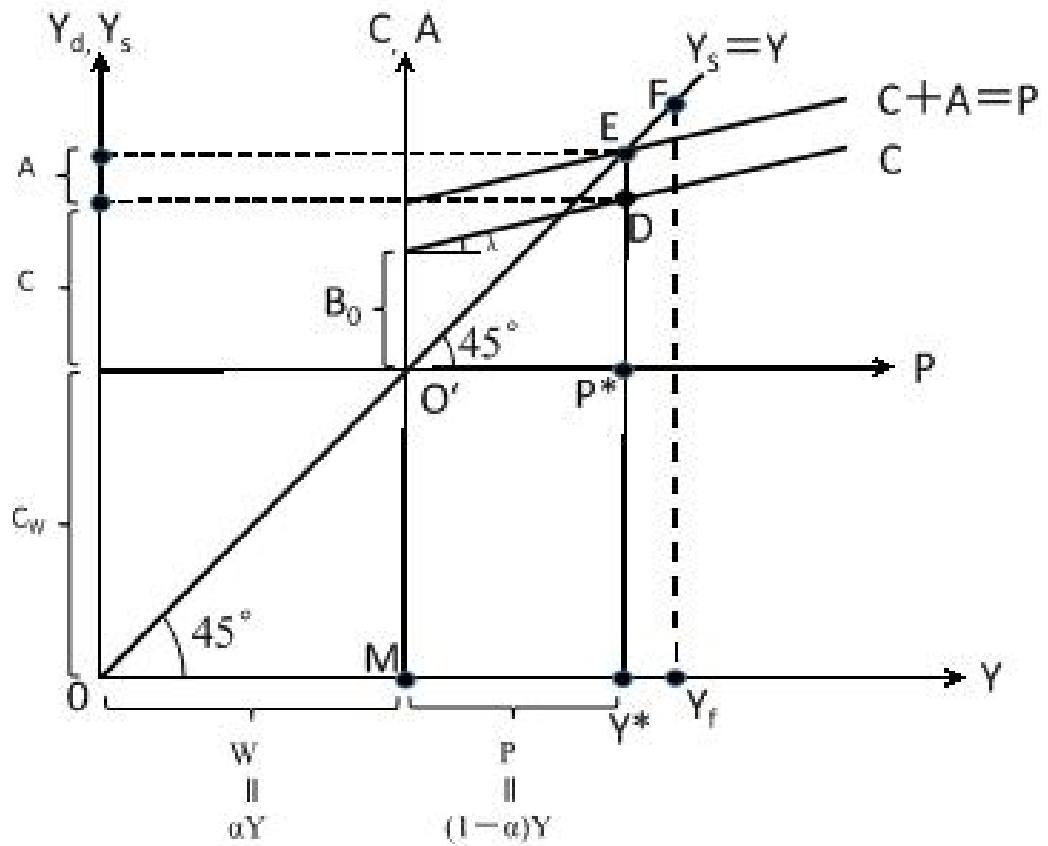


図3 「カレツキの45度線図 (the Kalecki Cross diagram)」あるいは「松谷の45度線図 (the Matsuya Cross diagram)」

III. 考察

1. 資本家モデル

(1) $P = C_k + A$ (利潤方程式)

(2) $C_k = B_0 + \lambda P$

(14) $C_k = B_0 / (1 - \lambda) + \{ \lambda / (1 - \lambda) \} A$

(13) $Y^* = B_0 / \{ (1 - \alpha)(1 - \lambda) \} + [1 / \{ (1 - \alpha)(1 - \lambda) \}] \bar{A}$

2. 労働者モデル

(11) $C_w = W$

(15) $W = \alpha Y$

(9) $P = (1 - \alpha) Y$

(9') $Y = P / (1 - \alpha)$

(16) $W = \alpha \{ P / (1 - \alpha) \}$

(17) $W = \{ \alpha / (1 - \alpha) \} P$

参考文献

欧文文献

- Davidson, Paul (1994) *Post Keynesian Macroeconomic Theory: A Foundation for Successful Economic Policies for the Twenty-first Century*. Cheltenham, UK and Brookfield, VT: Edward Elgar. (ポール・デヴィッドソン『ポスト・ケインズ派のマクロ経済学：21世紀の経済政策を求めて』渡辺良夫・小山庄三訳，東京：多賀出版，1997年)
- Davidson, Paul (2010-11) "Behavioral Economists Should Make a Turn and Learn from Keynes and Post Keynesian Economics." *Journal of Post Keynesian Economics*, 33(2), pp. 251-254.
- Kalecki, Michał (1929) "W sprawie aktywizacji bilansu handlowego (On Activating the Balance of Trade)." *Przemysł i Handel*, 10/30, pp. 1295-1297. As translated in Osiatyński (Ed.) (1990b), pp. 15-20.
- Kalecki, Michał (1930) "Symptomatyczne wskaźnik dochodów mas konsumentów oraz ruchu inwestycyjnego (Symptomatic Indices of Consumers' Incomes and Investment Activity)." *Koniunktura Gospodarcza*, 3/12, pp. 327-329. As translated in Osiatyński (Ed.) (1996), pp. 224-229.
- Kalecki, Michał (1933) *Próba teorii koniunktury (Essay on the Business Cycle Theory)*. Warszawa: Instytut Badań Koniunktur Gospodarczych i Cen. As translated in Osiatyński (Ed.) (1990b), pp. 65-108.
- Kalecki, Michał (1935a) "Essai d'une théorie du mouvement cyclique des affaires." *Revue d'economie politique*, 49(2), pp. 285-305.
- Kalecki, Michał (1935b) "A Macrodynamics Theory of Business Cycles." *Econometrica*, 3(3), pp. 327-344.
- Kalecki, Michał (1938) "The Determination of Distribution of the National Income." *Econometrica*, 6 (2), pp. 97-112.
- Kalecki, Michał (1939) *Essays in the Theory of Economic Fluctuations*. London: Allen and Unwin. (M. カレツキ『ケインズ雇傭と賃銀理論の研究』増田操訳，東京：戦争文化研究所，1944年)
- Kalecki, Michał (1943) "Political Aspects of Full Employment." *Political Quarterly*, 14(4), pp. 322-331. (M. カレツキ「完全雇傭の政治的側面」〔縮約版〕『資本主義経済の動態理論』浅田統一郎・間宮陽介共訳，東京：日本経済評論社，1984年，141-147頁)
- Kalecki, Michał (1971) "Class Struggle and the Distribution of National Income." *Kyklos*, 24(1), pp. 1-9. (M. カレツキ「階級闘争と国民所得の分配」〔改訂版〕『資本主義経済の動態理論』浅田統一郎・間宮陽介共訳，東京：日本経済評論社，1984年，158-166頁)
- Keynes, John Maynard (1936) *The General Theory of Employment, Interest and Money*. London: Macmillan. (ケインズ『雇傭，利子および貨幣の一般理論』上・下巻，間宮陽介訳，東京：岩波書店，2008年)
- Martinez-Alier, Juan (1987) *Ecological Economics: Energy, Environment and Society*. Oxford: Basil Blackwell. (ホワン・マルチネス=アリエ『エコロジー経済学：もうひとつの経済学の歴史』工藤秀明訳，東京：HBJ出版局，1991年)
- Osiatyński, Jerzy (1990a) "Editorial Notes and Annexes." In Osiatyński (Ed.) (1990b), pp. 421-594.
- Osiatyński, Jerzy (Ed.) (1990b) *Collected Works of Michał Kalecki, Volume I: Capitalism: Business Cycle and Full Employment*. Oxford: Oxford University Press.
- Samuelson, Paul Anthony (1948) *Economics*. New York: McGraw-Hill.

日本語文献

- 川口弘 (1977) 『ケインズ一般理論の基礎 (新版)』東京：有斐閣。
- 松谷泰樹 (2004) 「カレツキ経済学の基本構造の成立過程」『三田学会雑誌』(慶應義塾経済学会) 97巻2号，59-80頁。
- 松谷泰樹 (2019) 「『45度線モデル』について」『MACRO REVIEW』(日本マクロエンジニアリング学会) 31巻2号，36-79頁。
- 松谷泰樹 (2020) 「マクロ経済学の『基本前提』：カレツキの有効需要の原理」『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』(拓殖大学政治経済研究所) 第23巻第1号，121-133頁。